

インドネシアで 「お巡りさん」に 出会う日

東方孝之

がなくなったことにショックを受けた様子で、いつもは機関銃のように語る口調が弱々しい。「警察に届けた？」と尋ねたところ「届けない。届けなくても物は戻ってこないし。刃物をつきつけられて脅しとられることもあるのに、今回は物が無くなっただけなんだし。怪我がなかったことを神に感謝しないと

ある屋下がりのこと。Aさんに会って「元氣（アパ・カバル）？」というお決まりの挨拶をしたところ「ついさっきスマートフォンをバスで掏られた」との返事。注意していたのにそれでも盗られたことに加えて、そこにしか入っていない情報

ね。インドネシアのツイッターやフェイスブックの利用者数が世界有数であることから分かるように、それらに接続できるスマートフォンの人気は高い。「盗難品は今頃中古市場に出回っているだろう」とAさん。

犯罪の被害に遭ったという話を直接耳にしたのはこの赴任中二回目のことだった。ある朝「元氣？」とBさんに話を振ったところ「昨晚泥棒に入られたせいで睡眠不足だ」という。「朝三時ごろ、サッカーを観ながらうとうとしていたら雨音のなか不審な音がした。もしやと思って棒を持って外に出たら二人組が逃げていった。バイクなどが外に運び出されていて間一髪のところだったよ」。インドネシア人のサッカー好きは有名で、海外のビッグクラブの試合は生中継され、よく友人同士で賭けの対象にもなっている。この話はインドネシア代表が東南アジア諸国の参加するスズキカップで準優勝して大いに市中が盛り上がり、そこにアジアカップの生中継も続いて寝不足の人が多かった頃のこと。幸い被害も窓の破損程度でしかなかったらしいが「警察には被害がないから届けない。実害がないと動いてくれないしさ」とBさん。

こうして二件の犯罪が存在しなかったことになってしまったのだが、これら現地の人が被害者となった事件、もし日本で自分の身に起こったことなら、どちらもきつと警察に届け出ているだろう。でもなぜだろう？被害届がないと保険がおりないから？そうした手続上の理由もあるだろうが、どうやら私のなかには日本の警察に対する無邪気と言っていいくらいの信頼感——きつと助けになってくれる、もしくはこの情報を役立ててくれる——があるようだ。

途上国ではありがちな話だが、この国でも警察はあまり信頼されていない。つい最近も警察高官が汚職撲滅委員会と衝突し、挙句の果てに同委員会を汚職容疑で貶めるべく偽の証拠をでっちあげ

たらしいことが明らかになったばかりだ。もちろん日本でもいろんな不祥事があることは知っている。しかし、少なくとも私の警察、より身近な存在としての「お巡りさん」に対する評価・信頼感が高い水準にある。そしてそれはどこから生じているのかというと、小学生のときに五〇〇円の入った財布を落としてしまったけど交番に行くところちゃんと届いていたりとか、逆に財布を拾った場合には落とし主まで届くことを疑わずに交番に向かったりとか、もしくは盗難被害に遭った後の適切な対応を目の当たりにしたりとか、そういったひとつひとつの経験の積み重ねのうえにお巡りさんへの信頼が築かれているのだろう。また、それは親世代から代々積み重ねられてきたものでもある。

ところで、インドネシアにはスピード制限のために路面をわざと盛り上げたバンブーがあちこちにある。このバンブー、ここでは「寝ている警官（ポリシ・ティドウル）」と呼ばれている。英語が語源らしいこの単語、この国では「警察は寝てばかりで何もしない」という皮肉な意味も込められているとか。でも、この国の警察もきつといつまでも「寝てばかり」ではないだろう。時代とともに、給料をはじめとして待遇が改善され、何よりも職業倫理意識が高まれば、警察への信頼感の高まる日がくるかもしれない。日本も政府開発援助で交番制度の浸透を後押しするなど少なからず貢献している。

数十年前、私たちの子供や孫たちが大きくなったころには、「お巡りさん」がこの国にも当たり前のように存在しているかもしれない、そう考えると、その変化を目の当たりにするのが楽しみになってくる。不幸にして先にみたような被害に遭ったりしたとき「すぐにお巡りさんに届け出たよ」というセリフが当然のように返ってくるのはいつのことだろう。もちろんその頃には犯罪の被害に遭う人が減っていることを祈っているけど。

ひがしかた たかゆき／在ジャカルタ海外研究員

専門は開発経済学、インドネシア経済。2010年からインドネシア大学経済学部経済社会研究所に客員研究員として滞在中。近著に「インドネシアの障害者の生計：教育が貧困削減に果たす役割」森壮也編『途上国障害者の貧困削減』岩波書店、2010年などがある。